



## 「協同労働」が拓く社会 : サステナブルな平和を目指して

佐賀大学経済学部教授 張 韓模



【著者】 本山美彦（もとやま よしひこ）  
公益社団法人 国際経済労働研究所所長  
【発行】 文眞堂，2022年12月  
【判型】 四六判，386ページ  
【定価】 本体3,000円＋税

我々が生きる現代はさまざまな不条理に襲われている。戦争，所得格差，失業，貧困，感染症，環境破壊，人種差別などなど。著者はこの状態を「カオス（Chaos）」と言う。そしてカオスを抜け出し目指すべき市民社会の一形態に「コモンズ（Commons）」をおき，それを実現する仕組みとして「協同労働」を説く。著者のこのメッセージは非常に鮮明で分かり易く，我々にどのようなビジョンを描いているかを問いかけている。

著者の言葉を借りると，単純な思い込みや無関心がカオスを深める。ロシアのウクライナ侵攻によって石油や農産物の値段が高騰し，世界経済はインフレ危機にさらされている。このカオスは，一部の国が世界の農業市場を支配している危険性を浮き彫りにする（第5章）。また，

日本経済の長期にわたる低成長に加え，長期失業者の増加，非正規雇用の拡大，過度の労働時間，任期付き研究者など（第2章）様々な課題もカオスを広める。さらに金融複合体の暴走や世界中を駆け回る投機資金もカオスの主役であり（第1章），SNSの閉じ込められた世界でフェイクニュースが横行跋扈し，偏った考えや一様の主張だけ増幅するエコー・チェンバー現象もカオスを後押ししている（序章）。

それでは著者のいうコモンズはどのような世界なのか。「私は古来から慣習的制度である『入会』的な意味で使いたい。（中略）神戸市に多い財産区なども，入会の1つである」（p.323）と説明する。入会とは，村の共同体が土地を総有し，伐木・キノコ狩りなどの共同利用を行う慣習的な制度をいう。このようなコモンズ概念をもって，海外に目を向けると，協同労働の代表的な事例としてスペインの「モンドラゴン協同組合」がある。この組合は金融・工業・小売など幅広い領域をカバーし8万人を超える就労者を抱え地域に完全に定着している。ところで，この組合の出発点は何処にあったのか。それはスペイン内戦の影響によるモンドラゴンのカオスであった（第3章）。

本書を読み終わった後，最初に脳裏に浮かんだのはアルベール・カミュ（Albert Camus）だった。カミュは第2次世界大戦後の混乱期をモチーフとして1947年に『ペスト』を発表した。この小説で描かれる不条理は伝染病のペストであったが，ここで彼が叫んだのはこのカオスを乗り越えるための市民連帯と共同体意識そして誠実さであった。

著者は，木材の売り上げの1割を山の所有者に支払い，残りの9割を林業従事者が得ることで安定した収入を確保している高知県佐川町の「自伐型林業」を紹介しながらこの議論を締め括っている。VUCA（ブーカ）時代であるからこそ薦めたい一冊である。

（ちゃん はんも）